校正 北窻瑣談

[illegible]篇 一

イ 5
1637
1

北窓瑣談序

余頃日客居于浪華一日書
賈某袖寫本一部來告以乏木
之由取而視之則余先考隨筆中
北窓瑣談者也余曰夫東西遊記
與梓行世先考嘗既嗟膾炙没

門 イ
號 1637
巻 1
昭和41年12月20日
原安三郎氏寄贈
41E 9476

謀此挙也全究地下豈不大悖
乎爲文隱々旨余哉請辭焉
書賈曰雖然竊以爲一之書博物
宏覽義見之卓論々確讀者足之
以供三餘々一樂如夫再明歟
璞之與燭秘諸帳中之志何啻

41-9476

霄壤百冊回説不輟余不能拒
其請々切且憾至全部衍偽頗
多圖出原本披讎筆削以還々
之所塞其責了編中往々有圖
畫者書賈所増入非原本之本且其
編也先考隨筆中以爲証助者

讀者幸恕予時文政乙酉仲秋
書于浪華客舎
橘春徳識

北窓瑣談巻之壹

梅華仙史橘春暉著

一草花乃黄色なる静なるハよし。なべて何れの色にかあれ、あまり赤きハよろしからず。

一ミ緒こし乃画の法を直に模することを禁し、都なくも音羽山ハ米南宮に似たり。如意嶽ハ王叔明に似たり。

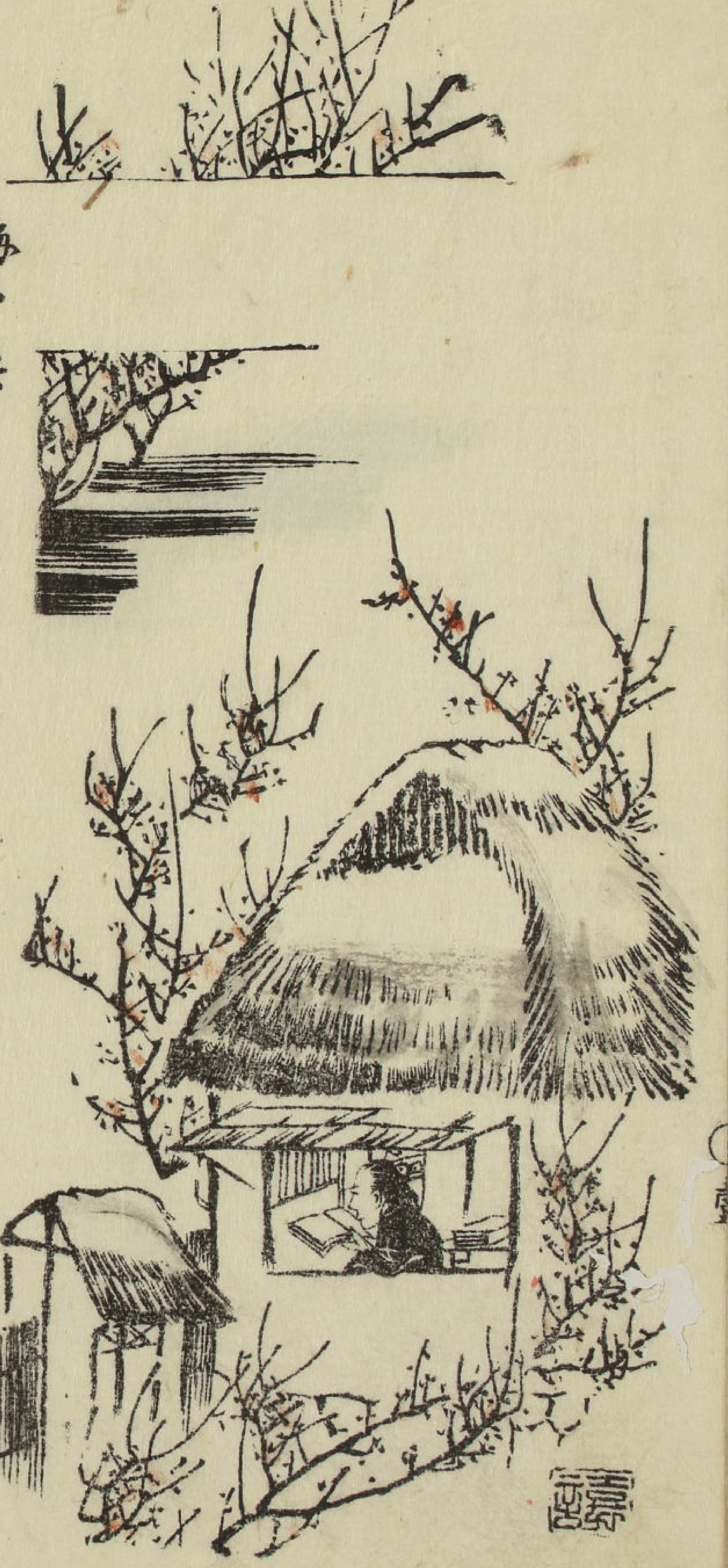
一伏見の桃山乃観月臺ハ（俗に宗治兄臺と云）山水眺望の地なり。余諸州乃名勝を見しかど、かくのごとく明媚なる艶なる風景をなし。世の人近きを鄙しみ遠きを貴ぶとて此池乃風景の名高からざるハ惜し

仙洞乃

一花ハ皆散過るれば御幸町より北を望見て木立のふりさへ若葉の梢青ゝとしたる景色なれば押しなべし姉小路より西乃方を見るもよし天明火災の後ハむかしのごとくなるぞ

一無くなりし友の仲献語らひしハ伏見の地ハ三才乃中ふて天地ハ餘り一ツまじへも人是れぞと云ひあへど思ひし

一伏見ふハ花木の地多し方五指町より一のあれる蓮沼一の里六七月の頃ハ紅白乃花池面にみちあふれて色香ふかく類ひなし暁天ふ小舟ふ棹さして花間に漕めぐれバいと涼し蓮花を見る處ハ他國ふてハ見及ばず



梅下照
興黄蕨壽流斜 恩梅華傳元々雅乃嘆 梅仙清妙採菖仙聲 月五
善禎夢
梅仙老先生壽梅溪雅渡東梱製以圓作情採來畫鍾之以
小詩
安政
洛東白芝山

檜垣女故實作

明治四年十一月廿八日
兼好法師ニテ実ニ金言アリ既ニ上位ニ登リタル人ノ栄花ヲ見ルヨリモ上位ニ登ラント欲スル勤苦ノ中ノ人ヲ見ルハ尚ロ中ニ興ヲ起スナリ
文仙

一 隠居乃上人ハ檜垣の女乃圖を見せなりしに今より千余年前へさかのぼりて衰微してやうすみえぬとりふもあく袖をくゝ様れ方へもへまりしと物知れる人に咲しが此圖をそ其詞のごとくなりしと語られたり

一 月さへさまあく花ハ盡あ歎をかこちこそすめるにやこゝに兼好をまさしく風流の道ふるいと深かりぬぞ都く徒然草乃一書其才氣の絶倫なるを見るべし此法師と打向ひて語せざれ人をしてく心酔せしむ重し

一 安永乃比都ふ住る人の書画れ呑に覧しても鄙の果すみても其名高かりしが人に招かれて画どもかきけるに

是日始て着し衣も筆拭しぬぐひ汚したる今の
世にはかなき事を風流なりと思ひて人の耳目を驚か
さんとするにも多かりける

一七月七日八日の比は家々の戸障子なども鳴りさへきぬ
東山の鳴動するなど人々驚きあやしみまどひける或
はじめ越の立山なりとて烟出しなんといひしが程なく
申しに信濃なる浅間が嶽のもえたるにてぞありける余が
言の一つのかりぬる道し年薩摩の桜島燃し時程遠き
にある何となく地震の中に障子などを鳴らせる事と並
と人の知るとしられもなき

谷左仲先生
柳川三省先生

一琉球人へ文やるとて表書に琉球国某殿と志るしぬれど
筆の勢ひやさすがに日本の橋と志るしぬべきをこがまし
き所書ありき

一寛政四年辛亥秋備後国芦田郡常村の農夫八十余
歳にして額に一寸の角を生じ翌年壬子正月十七日解脱
せり同二月備中鴨方村西山拙斎翁より文して申来る
唐土にも漢の景帝の時膠東下密の人年七十余角を生ず
むといふことみえぬまで古今耆老の人にまゝある事にや

一京師の谷左仲先生年若き時に柳川三省先生に従ひ学
びきし其比三省翁おくに安く往来せる途中に大仏道に

往昔一老人ありて、或時老人三省孫子に向ひ、某も殊の外に年
老侍れど、世の中に久しくながらへ申しても覚へ侍らぬぞ。さ
れど某が年来覚え居ける一術あり。某浪々なれば世に絶なん
事も残念に思ひ、御門人の多き中にも実直なる性質の人
に見当りぬれど、其術を伝へ申さんといはれしに
ぞ三省其儘左仲を呼て、此程かゝるすぢを聞き何事かあれ
足下行て学びてんやと語りましければ、三省の孫翰をとりえ
て彼老人の宅に行しに、老父も三省の撰びてこされし人
なれば秘略なることは為ずして、まことに其術伝へ申さんとて
いらく日を入れ来りおしへと約しぬ。此左仲老人に向ひ先
以御伝授を蒙る事なれど難有事なれども、其術
とはいかなる術にて侍るやと問しに、老人答て他のことに
あらず、某が学び得たりし術とは、此身虚空を飛行し一日
須臾の間に数百千里を往来する術なりといひしまゝ
左仲も驚き、さてはおもしろき事もあるものぞとて、其日を約
しく悔りぬ。左仲道きゝて思ふに兎角に奇怪のことゝいへ
なる心の人とも知らざるに学ぶほどよしとも何とも定める
されども三省の宅にいたり、老人伝授せらるゝことを語るが
まなりしが、聖人の道にも叶へることにやと、さればて妖
人外道の術なりとも多く得ることなかりしや。先ずやべしいふと

朝貞伯

みやと尋しかば三者も驚きぬ誠に奇怪のことなり聖人ハ
道に叶ひて深く学びたる人にもまさるべし此上ハいかやうにも
足下の心は才あるべしといはれしぞ病に托して其後ハ
老人へ面會もせざりし我経なく老人も死失て秘術の
御逢人の傳授をうけしとハいへとも定ぞなりぬ如何なる人や神
仙のたぐひなりしや今にいたりてもあやしく思ふことなりと老佛
老く此後語りきしと大川滄洲翁物語なりき

一 無益のことにも螻蟻の小虫といへども殺生をすべきことハ
況や氣あるさまに好く物の命を害し傷ひやぶることハ
不仁のはなはだしきなり

一 紺屋やうの者犬などハ漆ぬりて蒔絵したるやうにいかさまと
ましやしかりけるまゝ年頃まで何しに唐免さき
なる物も多くハにせしと見ゆ これはむかし家に分を
越て清らかに成清くしたるハ猩々のし

一 夜更くいぬまゝ藏鎖せしといふに婢女起て炊ぎなどしける
ぬやし何か音くゆり來ぬハ何ならんとおそろしく思ひける中にも
思へども聞もせぬやうにて次のあしきまぎれにいかにせしかば
く大なる土の戸まで見せしに雲氣にてぞありしかばおそろしかりし
よりハ…物のしくもやうあやしき事あれなり

一 遊行せし朝山東伯が宅へ訪しに出て和歌云

貞伯
奥田仲献
村山伯宣
川端草溪

一ぬとり人〳〵驚きハのよに出しと向へハ紅葉落ちりしへべ
の風に乱れ散る庭を見よ居る竹すゝき　猿丸大夫
乃紅葉の哥よまれしが其の字まで覚めゆえぬかしいろ〳〵
老しく退く志の出しきとてどよ見きく絵はぬ今もる
まやちと年よ返て貞伯も身まかりしと哀く。ぬしは
ちく出付ぬ

一五月雨乃降ましくて又古き名出し只今に今も無き人
の筆の跡こそ残れ目とまりて覚ゆ。貞伯が智識奥田仲
献が文才。村山伯宣が篤実川端草溪が温柔皆乃ふと
か為あり。天何乃心ぞやまやしふぶきを奪ひく泉下
客とまれる思ひ出るも胸はぶる。殊よ貞伯を家十三四
歳の比より十八九乃比まくは交りく。齢ふは十余年長
じ才は徳も世よ勝りまちく出しまりのりる皆耳ふ残り
く益者ありけるよ。噫

一伏見にく侍社を結びし須三宅象藏といふ人ありくハ京
師乃人なりしが聊由くありく伏見よ来り一医ふ隠を居る
乃或時乃侍ふ夏日偶成と題しく　城居煩熱憶南薫　却
望西山簇暮雲　索句書窓成獺祭　為医塵陌墮鶏群　功名
何説帰郷錦　詩社空懐會友文　久客不堪卑濕地　一年分半蚤
兼蚊　去付くみせたりしう　織ふ伏見の地蚤蚊多く水濁り

く京師の人ハさしも思ハ苦しくぬらし今ハ交人もなくなり
て悉く待乃ちま墨乃色もかハらず

一某卿のもとにハ尾張より鳥井乃銘を乞まうし時文人多く
ふさはしからぬを華表と書れしハ華表も何とやら不
相当ばやうらみ覚ゆるところいひ思ひよると為のみいしにも妥
嘆吝つく係の至り華表とも格別乃ものなれバ唯ら鳥井
と紳代の門と称し給ひ唯紳門と担ぎまさしくいひかへ
しとや仕りしに郷も左と作られき

一同し郷に土佐國の松山寺の紀貫之乃碑文を乞まうし
人のありけるに此郷乃へハ紀貫之しと書給ふ[illegible]官乃人なり

ところハ古賢の名すまれば名を称せんことをそんしたいまでや余
る此度乃碑文に紀子とありと作られた

一佛乃道殊にあまたありけるをするハおろかなる人のまさえ

一此地にありぞ生れて先くおふしたる折ぞ人情世態乃
委曲すらも通じあのつれも知るべし一生涯枕をあらそふと
あく無病壮健の人ハまぎれなる賢者にちかきかしら
強きあやかりし

一我友保田某浪もとより任者へ詣し時雪降風烈しかりけれバ
途中より雲助駕籠とらんよりのち[illegible]二人とも雖もなく

膝にあらハなる繻絆のひらくまれを肩よりうけ、おもひきや
る色もなくかきてそゆかざる。保田根り高く所さ流れにも
く錦の衣の恥さく霞ひきたる人の地にかく塚うきたを
にこそと尋ずに我好しきろ身やどる風のあるあれど君
しぐのそうり心の内安かり乏

一 初えく西遊思ひ立しは仲献も伴んとくずや近き日に八
ちう立ぬ登しと旅装せし日平子虎来りて袂別の侍や
あるを尋しに何きあしとひよゞのなれとらくでなくも
作る登しとく筆をとり方寸之心六尺身飄々二十六
本姜家添経飯成雙口跡歴群郷流美人洛下名流投刺羅

江南ノ風物寄懐新自今誓使遊行ヲ作字々風霜句々神と
思ひ煩つる色もなく出せし仲献こ年廿六才其比傚不知
を世を去りぬ。仲献も浅きく泉下の鬼となりぬ　それぞ
し年の経りしや先なり次の年余猶り漫遊して二年を
過しく思ひ掛りまく其時の事を思へば魂ハ消き
仲献名を世文とり俗称を奥田周之進とり尾張乃人
文才あり。詩を詩文章をよくせり八七言歌行も篇を
に長せる所あり絶句ハもすぐるにあらざる。文章ハ主之美を
継とす。其四部稿の中面白く覚ゆる文章廿巻を手写
しく点を加く評語を下せり。其手写乃本十巻今現に余

の家に蔵せし外汪道昆の太函集全部、前漢書全部、史
章絶贍の為に手写せしが手写の本甚多し。皆評語を
加へ、漢書四部、摛太函集の三部斗ありしも一遍読ける人
だにおほし。況や手づから写して且評語を加ふるに至
ハ、世の常人の及ぶ所にあらねバ、京に遊びし時、一名家先生
を請ひ題を出さしめて、七言律詩の一日百首を作らんと云
しが、其ころさすがすゞしくなりぬ。惜しむべし。但其秋を
たのんで酒を使ひ釣ひを不慎遂に病を引出して身を
喪ひし。歎く歎く悲しむべきの至りなり

一 蓬莱頭日向国高鍋の郷に牛養姓の人ありて称ハ忠兵

に住んで鎌倉より来りし人十家許ある中の一なるといふ
孫発と姓あり。太宰春台の漫筆に、往昔鎌倉の頃ハ牛
養氏ありし。漢土の馬矢姓およそすありと見えたり。按
も彼牛養氏なるべし

一 ある里を志せし人の、一日に十里ばかり行かん、又十日を要ぬ歩
し。人よりも名所も多く見、早くも到りはんと思ひて一日に
十五里も十八里もゆくべし。よろづ学びの道もかくのごとく
なるべし。人にも手足あり、又五臓あり。我にも手足多きにあらず
五臓異なるにあらず。かの腹さくるまで飯をくらひ、心あるまで
青みるよりいかほどかあづかる人は常もでや

一何事も趣を解さんと解ずまじ。更に好味をみな常とせず。書

よくハ杜鵑の声乃おもしろしといふものハ何らざれども。嘘を

雲啼打乃夜ふけ而声をやらかる五月乃雲ま。をめづらあく

一声他の鳥ニ比すべきものなし。然るにむかしより杜鵑ハ一

声ハ営乃初音より外ハ人の待ちるをあれ此境を會せ

ざれバ歌の名も屋をおくべからざるがごとし

一蛮國の人ハ。假玉を以て日輪の火を取り煙草を喫する

日本乃人ハ日輪の火ニ取る恐多しといふ戒ハのみある事を

不審せるとぞ。又日本乃人の月を面白しといふを笑て孫

りかゝる月輪の光のあれバ面白きるやと怪しみけりとぞ

星者のこと。理窟の上よりいへバ蛮人が方ニ理あれども日本

の人ハ其趣を會し。なるとハ賢愚の違ひ天壌よりも甚し

一粛慎の矢ありとて。松前より来り伝ふるを。塘雨が方ニて

見せ侍りし。其長さ都て壱尺四寸三分。箆ハ楊にて本と末

ニ。先ニ獣の脛骨をもて三角に削り。長三寸二分。の根あり

其根の先きニ又竹乃鏃あり。長壱寸五分。窪みある所

ありて毒を納るべし。筈ハ箆の先にて直ニ箆を削りて作り

黒くして鴨の頭と見ゆ。羽乃長さ三寸五分。四つ羽ニてはぎ

是ハ水中を射るが為なり。根を仕込みて後ハ獣の筋をもて

まき巻くにテグスのごとし。羽乃本を樺皮をもて巻く。根鏃筈

三所ともに筋まく巻く造りし象眼金にし。是にても罷に
ぢを射るに足るしるしやりぶかし

粛慎之矢圖

一 擬を遅く〳〵おし葉なる名をよし 桃の時を封ずして咲
又は赤なども色うはろひて青葉に交まじるハいとおかしくおもしろし
一 仕丈に住せしほどは梅山にても極近ろうしき日毎に出生なり

興して遊びぬ。年ごとに如月の中旬までなり月もよく花
なれば夜も大かたは梅山にのぞ遊びし。月下の梅花にて
白く〳〵銀世界の心地ぞ。殊に夜ハ白山一しおにさひやうれ
う化の花のなぶ香花にかるぞ。唐土の羅浮山なども斯く
や有ろ。我国にて梅花多き地も有れども斯く清雅なる梅
山はあらじぞ

支考

一 或日風俗文選読しに許六が至りしぞ。支考が才の
秀でたる此道に秀でて前後に人なしといふべし。許六は支
考に劣なく見ゆ

西行

一 和歌は西行抜群の名家なり。然しき歌は殊に一所しかれども

鴨長明

草庵集

よそにまじはらざる元骨をぬけたる詩人にたとへて孟山人なり
近し

一 鴨長明が道の記讀たりし比思ひしハ名に高き程に似もやらず
ざれごと拙し讀も續べからず是程の才にて文臣なりしハ如何
しむかしの漢学は世の人驚きし事もやしぬるや又其後
人の偽撰ありやとうたがはしく人に問ひ語りしかど猶年
重く何とかいひし書讀たりしに世に面白き記も出て其名
そだりしとぞ誠に當時にも世の人の眼に毎き物ハ何もざりし

一 頓阿が草庵集ハ近世の人殊にたふとみて和歌の正路の如
おもひなれたれど讀て見れば一首として元骨あらざるハなし

此道筋より学ばずしてぬきんでて名人の位にいたるべき
はべらじ

一 吉野の何院とかいひしに後醍醐天皇御製の和歌一首あり
侍りしが其中に
大かたに打まかせつる世をばさて
身にしへて思ひしらぬかなしさに
此二首を辞に尋ねて傳りし
せし故に英明の聖主も時代なれども此歌ふかく思ひの
寄られぬ

一 日向に都の城辺を井を堀て去源し三十尋におよべる

なりがたく深きときハ井の底より白昼に星を見るといふ

一 阿蘭陀船長崎の湊に出入する時ハ必ず大石火矢を放しぬ故
つねに山嶽を動かし和漢の人皆驚き見ることなり或時
余が友唐人に向ひ通事をして今の石火矢の音をいかにと
どひ尋しにビイーンといふて答へり和人の耳にハドヲーン
と聞ゆるに唐人ハかく聞ゆ其形容の違ひ格別なること譬
にいやしむべし

一 市中に閑を得るハ子過る後に在り其深き時など家人も
皆寝静り通りの家々も音静まりて後我独り寝もやらず
軒近く端居して蒼然たる月に対し西行の筆好などの在し

趣など思ひ出けむ其書の中に深る身をも忘れしハこゝろ
ゆかしけし

一 花の頃紅葉の時ハ何れの地なりとも勝れたらんなれど一
年高尾山に遊びしが紅葉の様ハ他に勝れてめでたけ
れど其地の見所も無く只寂しきのミ覚えぬ古人
のいはれある所にも勝りてかくハ名に立しや

一 余が十余才の時常に思ひしハ平なる地の方壱丁ばかりの
所も有らば紅葉のまゝなく植わたして其中に庵を結びて
住たしとハ一つの身を終しり見るんと今にても此心ハ消ぬも

一 余が幼きとき家の東表なる所に矢の竹の生ひ居たり

し所へ月さし出る頃窓に影うつりて画るごとくなりしを
面白く覚えて何方に住侍るも東の窓には必竹植置し
と思ひしが年たけて後ハ世の中に交りてたちさく遂げ
ぞ打ふしハ此を思ひ出て風雅なりと語し

一花ハ山桜の一所なれ深き又たぐふべきものも覚へず唐土人ハ月
に見飽ぞさる名高し此の人牡丹乃色葉此高きなんど云ふ
うはさる情ありぬとやいふべき

一君なくてぞ徒に見せん梅乃花色をも香をも知る人ぞ知る
世の中乃嫌しけれ悪しけれ唯我身にこそあるべけれ菊酒
寄志まる志るされてかくしるさむハ侍さまた似れどもかな

とも思ひけるよの音を葉未ざる深りしうち浪るにこゝの思ひ
人のおもひやりなるみならの下よりよりもしるまさつて花也
に秋のしきを云浅くも思ひける

一月見るハ打晴たる高楼より未何らぶ高起よし低き木
の影にうつるも一興にて

一食物ハ腹にみちるまで見る事なし家居ハ住なれし所広く
作りにせず偽に云のぶるもあり。だくさく狭きも一興
人目遠きなるまゝ絹きさる人の心ありて女なるよし繋ぐる
ちはくろくざる下に住ける家まで何ちあらひあはれてこそ
見えて覚ゆ

一酒ハよろつの薬の長ちなれハ、引出ものゝ一ツ人乃心を和らぐる
くすりともなれど、過れハ病をも生じ、五十近きまでハ
慎む事多かるべし。されど月乃夕べ花の朝、いつとなく親
しき友に打向ハ、盃やりとり物語なども打とけし時ハ楽
しくや有るべき

一人乃子をそだてんに、君に忠なるし、昔物語・親に孝なる世の
噺あるひハ常しくかゝり、虚ならざるべし。寓言にも益あることもある道を
身に於き悦ばしく思ふべし。是ハ語りにも虚なる事もあるべし

一味噌汁ハ常に後世のものなり。唐土にても今にあらしといふ。日本
に應仁乃頃より以来出来しや有らん。それ己前ハ内の御膳に儀式
なくて、味噌汁を用ひらるゝ事なし。但し汁ハ澄まし、味噌乃
如く常に食用にせらるゝ事ハ昔よりありける。今のひしほ
ハ庶人の食する物なり。味乃字ハ古へ味醤と書く上
の畫を略くし、末の字ハ従ひなるべし。後世鹽の字に従
ふ。されハ是も何や或ハありしとぞ。内膳司濱島氏乃物語な
りき

一是ハ濱島氏物語に於て、今の飯乃湯なりといふ。
粥乃こと延喜式にも造り法なし。丹波氏ハ又医乃
造り法を傳へられ、是ハ後世のこととなるとぞ

一舊事記・古事記等ニ出る所の景行天皇御身長壹丈戴寸

日本武尊御身長壹丈仲哀天皇御身長十尺とみえたり。古
周ふ用ひられし尺といへバ今の世乃尺ふ也。周漢の古尺の事
ふ異なり

一讃岐国乃人森長見著述の志貝とよべる假名文を見しに
其中ふ米價のことを載せし日本紀ふ顯宗天皇二年歳比
登稔百姓殷富稲一斛銀錢一文といへり。又續日本紀ふ元明
天皇和銅四年錢一文ふ米穀六升といへり。又三代實録ふ清
和天皇貞観八年二月大政官處分定左右京白米を非違直錢
四十文前二十文今加十四文黒米三十文前十八文今加十二文
是歳穀價騰踴東西津頭白米一斛七貫二百文黒米四貫七百

文由是増定京邑沽價といへり。又百煉鈔ふ。後堀河院寛
喜二年六月二十四日甲申定米價斛一貫文といへり。又太平
紀ふ元亨元年夏大旱ス此年錢三百文を以て粟一斗を價
といへり。又重編應仁記ふ弘治三年五月廿三日より八月九日迄
天下大旱ス今年金壹両を以て米五斗戎交易せし前代未
聞の事なりと記せり。又秋齋閑語ふ室町殿日記を引きて文五
曰御局衆年下疋切米二十石賣拂可申由にて作越ふ此頃
兵庫之賣買一斛大豆三升五合之由吹田屋彦左衛門申に。御
ほん心にてさなきゆくの文のとき是を天文九年のことなり。又草
蘆雜談をみれバ古田兵部乃米を賣て法金を出しふ。十文

同に付壱斛銘あり其文にいはく。是は慶長四年卯月十五日
兵部判とあり。又太平記の紙を見れば。楠の米を買入。山
門に寄附し軍餉に備ふ。米一千二百餘石を黄金百両
にて買得たることを紀せり。又三代実録に。貞観九年四
月辛卯東西始置常平所出官米而糶之米一升直新錢
八文京邑之人来買者如雲是時穀價騰踴内外飢饉米
一斛直新錢一千四百由是官糶以救俗弊焉とみえたり
本朝当その田制。三百坪を以て一反とし。三十坪を以て
一畝とす。水陸の高所により不同ありといへども。大概
一反を壱石五斗。或は一石六斗。又は壱石三斗とせ

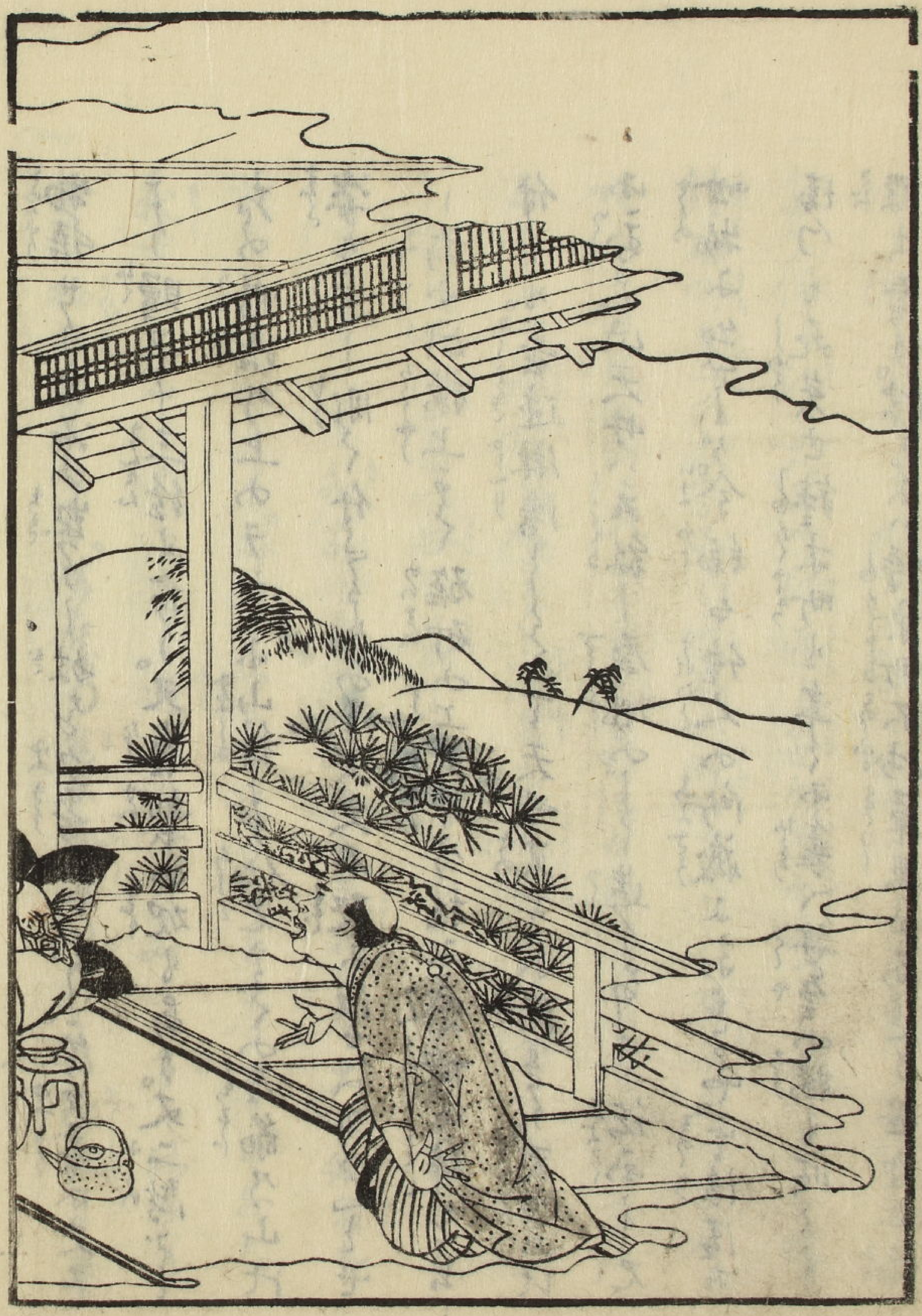
一 本邦法令題目の書。法曹指要抄に挙る目録

令十巻 贈大政大臣藤原不比等奉勅撰　律十巻 同上
弘仁格十巻 大納言藤原冬嗣等奉勅撰　弘仁式三十巻 同上
延喜格十一巻 左大臣藤原時平等奉勅撰　延喜式五十巻 同上
貞観格十二巻 左大臣氏宗等奉勅撰　貞観式二十巻 同上

石等の書は本邦政事の書なり。法曹指要抄は明法博
士坂上兼明撰なり。桃花蘂葉に令は我朝の法度く
律は我朝の刑書なり。格は臨時の処分なりと云り
一 伏見撞木町の青楼は大石内蔵助山科に在りし頃遊
行通ひし所なり。安永の末つ頃まではいまだ數寄残り

飛く繁しくれしも妓女も数十人ありしが余ら物名伝へり
書き伝しけれは大石乃行通し笹屋清左衛門とりつぎ家書様
鐘木町第一の太夫にて大石の時にもなじみ深く家居も豊か背乃
頃乃事を思ひ出られしが臺書の清右衛門は七十余りの老人
ありしが俳諧を好みて俳名を有軸といひ余も知やさしく
なりし。此清右衛門が母乃若かりし内乃事なりしが大石をも母も
よく見覚えて知る人にて此家に所持せり。大石俳名を
山キとりなしとて。知る人ある皆ウキときこえり其余に
義士も大石とて人まり遊びし人々の知しも多く残れり。
母乃物語なりとて。清右衛門余に毎度語りし乃珍哉するなり

物語せり。大石の契りし妓を夕霧といひしが。夕霧に大石
より贈りし三絃も所持せり。又唐製の硯もあり。又二階ざし
きの鴨居の上のランマに山科より伏見までの景色乃山水
姿を写し彫て付てあり。又大石既に江戸へ下らんとせ
し前に此楼上にて銘硯の上。天井乃板に感慨の辞を書
付しも墨迹淋漓として天井其まゝに残れり。天明の比
に至る。此天井は取放し屏風のごとく造りて諸国に見
世物に出せしが。今猶縁ある人の所蔵となれるや。其後清右
衛門も死失せ鐘木町も年々に衰へ笹屋の楼も段々に
毀ち売りぬれば今は鐘木町不残草原となりて笹屋に有



春章

し硯三絃なども皆散々に賣拂ひぬ。書樓なかりしも大石が
世の残り居て。笹屋の樓上に登られし懐古の情懐から
ぬぐひしに。笹屋の子孫も今は絶えて。撞木町にも在轉
は不都合ならば先に書きし茶屋の荒廃となりしのちに移り來
りし歎ぜるものは一かすりありて。寛政年間より漸く
往しき茶樓繞に二三家。往人まや建立せしかど昔の俤なく
有るぞ。笹屋よりの大家もなく二階のたしぶみ幅も間半
餘も有りし二巴人は手を携へながら飲食のおまくも粗悪
な為を極なりし。余が初めて此處に往しは皆今さこぶる

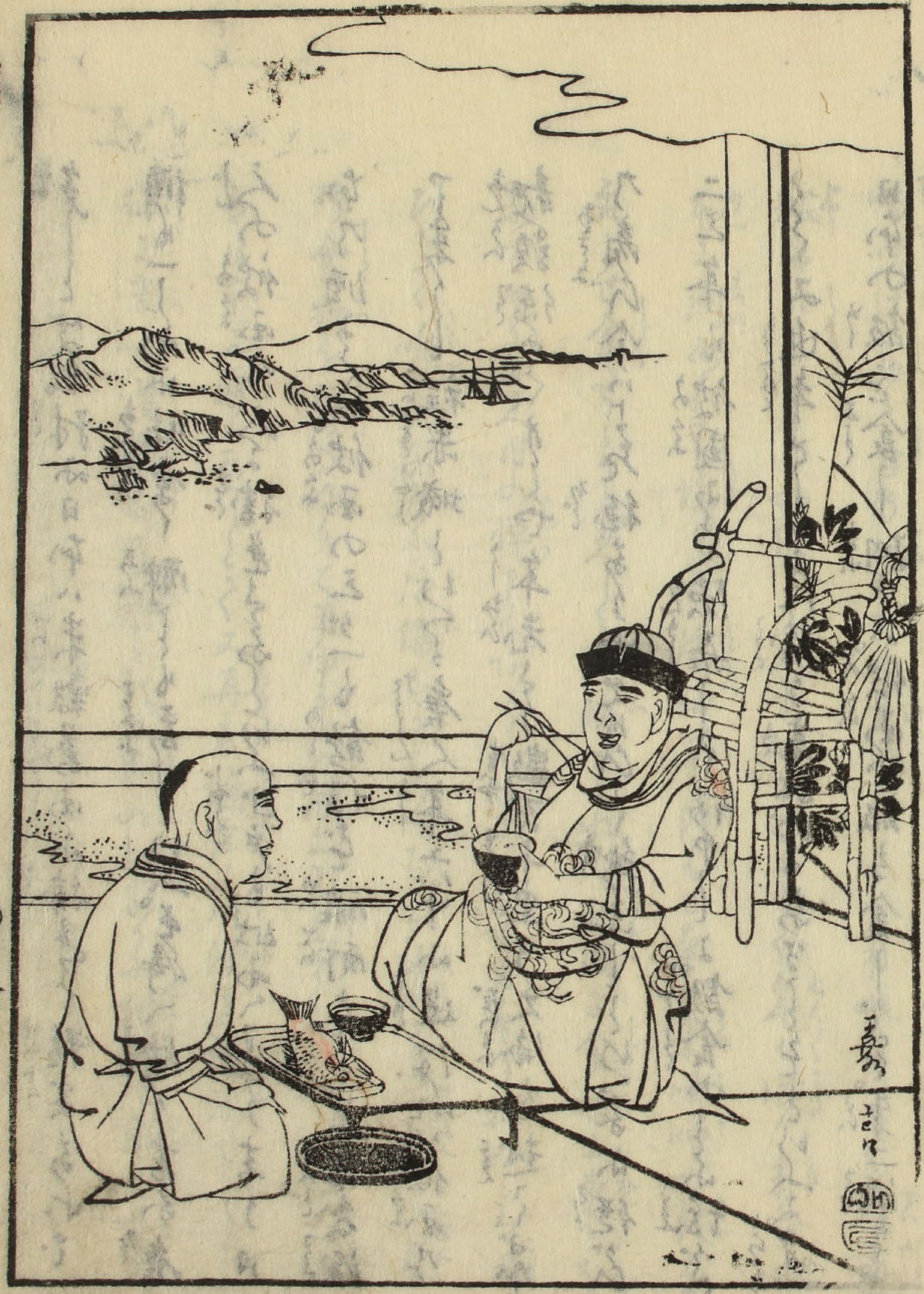
一 此の内ぬまは常に今様かんしたのを志るべければ人に多し

なる擂人と争ふ事ありしぞ。其身さへ才藝長しなハ何ゝもなく
比ともなじる人ありやなハざりしにや

一 おのれさきにおぼる中にハ。やかましきことある所しきりにさく宴
となく好みし。又重なくきこしし腰が中ゆる礼儀ともられぬ也
常に心に佛を志も所し

一 俳諧子などの頭しなる紀元手史文などの何かしるすとも
われ往く事ある人々に倭るハさることも思ひながら也ぞすさ
して覚あり。只何となく打志ほまて顔しと居る人ハ何なれ
も一しかなし

一 僧山伏醫師神主などの類。芝居などに打わく我顔なる



いとふくし。女乃聖人の道乃すなはちいんあくるふる又ふくし
ましてそれふ仏ね居てもよきなん

一 司空図が詩ふ解「吟僧亦俗習「舞鶴偏癡」と述ふ今時乃僧侶無学无愚なる八倫たしがし文字ふ於る僧も。只経菴の風のまねて世ま御ふの徒のミなり。実学実行乃僧ハ希く司空氏も是をみて憂るにや。此句六如上人の室に出付有まし我平埜氏なる人見来りて。余ま語りき今まで是傍のことふま所なしとあり

一 酒のよしあしは清酒よなりし八幾ふ石四五十年此まるのことど。今ハそれも西国の偏地ハ皆濁り酒なり。唐土なども濁り酒

多しと喜ぶ。殊ニ日本ハ米穀菓蔬ニ備りて精実なれバ
酒も一しほニ味厚く酔ても爽りとして、上戸ハ濃り事なく唐
人が彼国の人を備まするとして、上戸もいかにも多く来り日
本乃酒なくバ、彼国の三が一も飲得ずて酩酊をとりなし毎度溢
るゝ事なりし。程赤城といへる唐人年六十ニ近けれバ、彼国乃
親類縁者もくれなきや、年毎より數百千里乃大海を越て日本
乃為ニ今ハよき程ありやうれしとて然るべしとしてゐにて従ひ
二三年も彼国ニて隠居して何にしニ飲食のことにて塩ぐ
くして近年とふてに渡り来ぬ。只の事もしとにてよきに第一
日本の飯を食し、馴てハ彼国の飯を食しがたく。第二酒も

味噌汁なく香乃物なし。是等乃もの日用のものなく程赤
城も此才なりしより六十余ニ及ぶまで年々渡り来て日
本ニ馴ぬれバ、塩がて渡海せし時ハ日本の米味噌の類を
取よせ食せしとぞ。久しく渡海せざれバ別段ニ食味ニ奢りを
なすやうに人間の憚にも拘りて、常々ニも日本乃物のこと用
ひがく、唯商ひの為ニ渡海なりといへど、左右さに一年半年
乃食物を想ひ入ゆりて用ゆるに、人間ニ是ずよきぞ。殊に先
も日本ニ通ひ居りしとぞ。又再度近年引続き渡海せざるとぞ
諸ニ米味噌酒香の物を乾日本のおもむきニ我国に成らせる
人ハ是よき事をもちらず猶山海の珍味美食を求るハ奢なる
りへ一

山家おもしろき地に庵り結びて。世を遁れ住まんとならバ
うり么かしかるん但親しき友に遠ざかりて住まらしかるん
本ハ文思ひえるし

我子あらバ其ハ申芭よるの雪

大宰春台

一 我子あらバよきくるやうじ萩乃雪を作りしる。誹諧の正声なれ
りと云べし。其人乃情おもひやりぬべし。又雪の真に象し小僕に
酒をくハしむる侍風流なれど矢ハ侯

一 佐兄ふく交りし盲人乃医。尾藤意俊といひしが或时の発句
ま 手にふれし紙乃ちぎりたる蜻蛉かな　身にとりて実境なり

一 大宰春台の誹諧乃事。詩に織なく。詩歌などにハ似もやらね
やうにいひおしぬまで。それを此道を知らざれむあるべし。

其角

一 唯乃委曲に通じ。一偏しく三嘆せしむるも此道に多し

一 其角が續琵琶行をよミ題あく　十五夜酒を飲出して名ぶ乃
月と吟ぜし十五文字に尽情を伝せる於いにおもり。酒に全盛をまて
しり。ふの月乃五文字に零落の姿をうつせて。絶妙乃作といふ
べし。白楽天の數百言を費せし是を嘆む恥ぬべし

一 同人の作に　稲妻やきのふハ東けふハ西といひし下乃五文字
無くてもあるべき乙由が　萍や名ふる所ちるの岸に咲といひし
にる無下に劣れり。実に萍の句ハ世乃中の変遷常なきを
よくいひうせり此人の胸懐おもひやらる

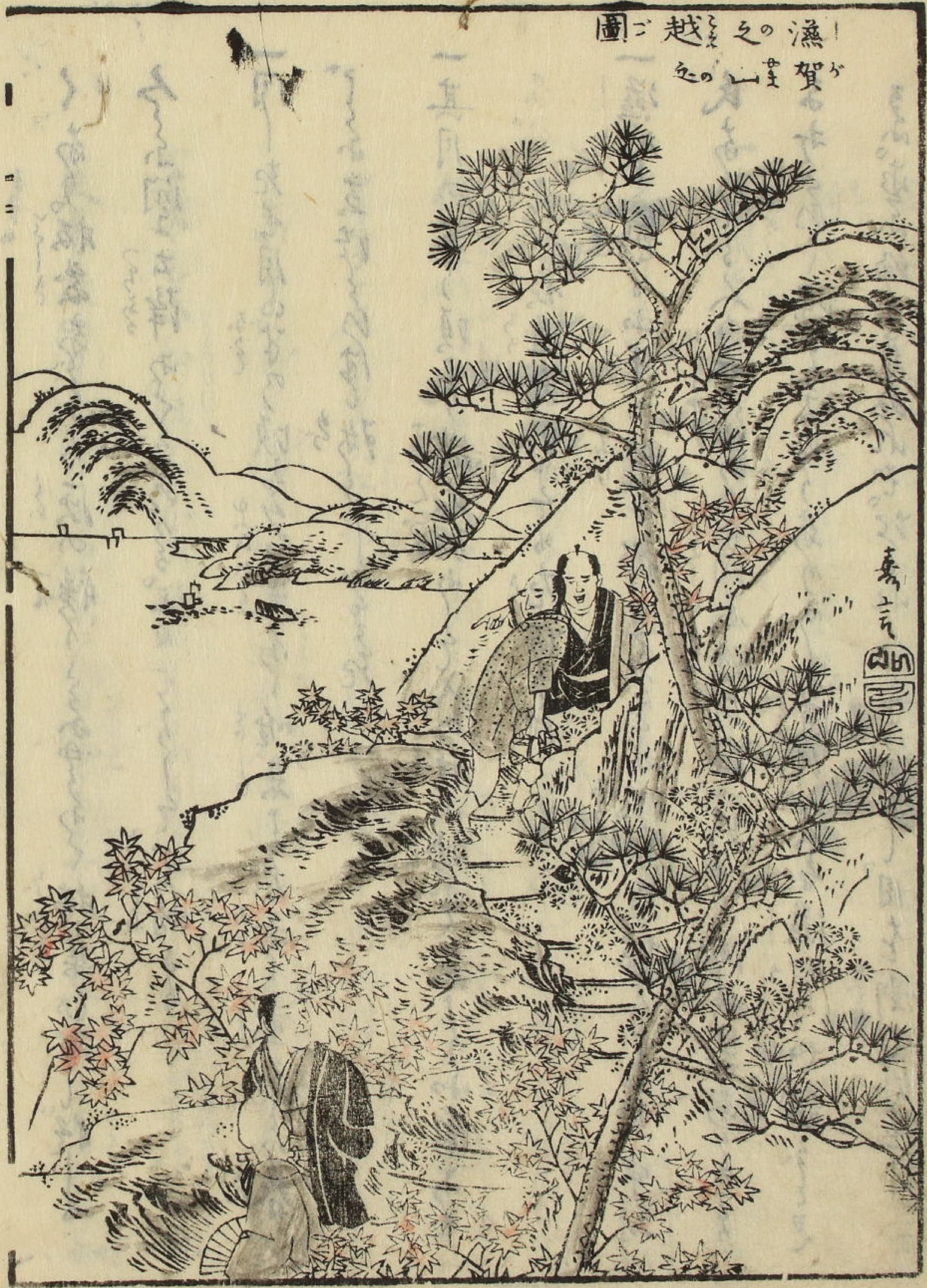
一 支唐禅師を源る和が又の名おの友なり　清風行脚乃时

出羽國に同宗の寺ありしが。去りし遷化ありしに庭前に
椎の木の大なるが朽て半より折れ落けり。一日住持此木
を久しく眺め居たるに。朽たる所より雌雄の梟二羽
出て飛去りぬ。其跡をひらき見るに。ふくろふの形を土にて造
り置たるが一つ有り。其中には早く毛も生じて啄足も
そなはりおし生気も有るやうなり。これをもつて太元さまに納
鳥経あり。住持もことに怪しみて禅師に是を安置せらる
ありしが今の何つも見るとて称し古歌に　ふくろふの朝
日出に毛をとどく昔のなさけ今の何ぞあり　と書きて
いたく其の事なるべし。梟の倍土を以て造るもの

あつて住持は禅師の博物を感ぜり
一　春禅師信濃に遊ぶの折ふし庭前の木にカツポ鳥といふが
来りて数日啼き居てさらに人を恐れず。依りて名付て近寄
て見るに。間もなく何も見える数日にて及べども。同じ鳥な
りと餌を啄むとも何事も経日指に啼き居るもなりし
に。後には人の手に来りて餌をあたへ喰せらるる。いつかならぬ由云ふや
かゝる事はいまだ聞かざることにて。不思議なる限りなく人々
いやしみけり
一　山城國笠置辺の山に秋の初めの頃彼辺にて日ぐらしといふ虫
何ぞ。数多ありて大きにしく。声のもさまざまにおもしろき事なり。他の

田なく何より望める田あり。其形ちハ手なりや見ぞ。人家の庭
近くも山ある所まくハ其辺望也
一天明癸卯の仲秋伏見へ行ものありしに。四方もち暑ゆく清
なりし其乃日の庭露ときるくて。それにて行る雲し。雨近
たやしたれと雲あるにハあらぞ。若狭山三ツの峯も見えず。大
佛殿の棟も煙とのやうなるもなく。稲近辺揃ておし黒きる
みえるでもなく。松杉もまる餘ぞ。怪しう思ひはし肩輿乃き
くれ者一かけく請のゆくに道行人も怪しとて土降なりといひ
来やきに紅付で外にあるしとなりきしと見ける。其次の日
又其次の日も同しなりしなく。日輪も光なく只月を望むが如

く。なりし。桜家なども成る所の積りくるに。まつなく拂集む房し。桜しも
人に聞ふ土降なとぞ云ゐる。三日ちかりして空晴より
一同しき其月の中の頃る夕日光なく唯朱よりも赤く。童などハ暮
ごとに立法と此儀珍しがりき
一其月の末乃頃より満天打かして人の顔に映ぞて東より西南にも
初夜過近辺頭中てる左ありき
一滋賀ハ越る山中の峠を都近辺にての風景乃地にて。家交中村
民なりける人の重湯の日に同志誘ひ行く。湖水ありける
手前くひ。峠より又帰り来りて。道行人も滋賀ハや越えて見ん
るに。空に帰り来ぬれど。なれ人ともいはざりし。月を側てり也し



其いの枕のしかたとして我に語り出でし気ひ合しに至て此事人
に語れども風流好める者にて皆けてみるにありとひき
一但来の義乃古楽のうを数美して三絃ありの類ハ殊に尽くりて唆
云ふ所なし。甲の義をとりてと甲の糸を鞁し乙乃義あれど乙の糸を鞁
きるに出来し。是ハよ元三絃を学ぶ人ハさもあるべし去りとて諸子三絃をもて
古楽の雅義に比して論ずるにハ不可ならず。されども今の楽を以て往古の
楽あり。人情を融和するは何ぞ是ならんや。余も糸竹の事ハ性の
好める所なれバ多く学びしに三絃を浪花の音を天下第一とせ
しし。甲の糸を調へて乙乃義とし甲の義をて乙乃糸を合す
或ハうつくしうして絃繁く絃跡にて曲苦もの類を好む知音にあ

らされどいひがたし。来藏子唯東武乃三絃乃ことを聞て評せし
浅見なれど何事のみも一芸道に深からざれば是等は議しがたき所なり
ととし